草津東　町内だより　（令和五年）2023/ 7/1　第478号

この人を訪ねて＃225

高齢者の地域 〝ささえ合い〟に情熱を注ぐ

社会福祉法人 広島県同胞援護財団
広島市庚午地域包括支援センター　社会福祉士
中村 英 寛（なかむら ひでとも）さん　50歳

幼いころから人の〝お世話〟をすることに関心を持ち、新卒後若くして2カ所の特別養護老人ホームで介護の経験を積む。剣道四段で習得した「信・義・心」をモットーに、地域の福祉サービスを必要とする高齢者に接する。

「皆さんには釈迦に説法かもしれません…」と前おきして、民生児童委員（以下民生委員）の人たちに、中村英寛さんは語り始めた。

先月下旬に草津公民館で開かれた草津・庚午南地区民生児童委員協議会の月例会で、西区・庚午地域包括支援センターから講師として派遣された社会福祉士の中村さんが、『介護保険の取り扱いや見守り対象の老人宅を訪問した時のチェックポイントなど、『質疑応答』を交えて講演した。

地域に住む高齢の人たちが、日常安全で住みよい暮しができるように、民生委員の人たちと情報を共有して見守りたいと締めくくった。

地域密着を目指す

1973年（昭和48年）、第二次ベビーブーム時に生まれた中村さんは、広島市安佐北区高陽町（現口田南）で生まれ。地元小・中学、祇園北高校から、佛教大学社会福祉学科を95年に卒業し、広島市西区に新築されたばかりの三滝苑・特別養護老人ホームに勤務。5年後、安佐南区・川内の里特老ホームを経て、6年に「デイサービスに特化した「T&T WAMサポート」株に統括ケアマネージャーとして勤務し、2021年4月社団同胞援護財団に転職。西区古田地域包括支援センターに勤務。今年4月、前任者の異動により、同区庚午地域包括支援センター（以下庚午包括）に勤務することになった。現在は草津・庚午南地区の「みゆき川ネット」や庚午地区の「庚午ほほえみネット」などの地域のささえ合い支援事業を主に担当している。

地域包括支援センターとは

▼高齢者の生活全般の不安を解消するための機関。▼広島市では高齢者（65才以上）が住み慣れた地域で安心して暮らせるよう、保健・福祉など色々な面から支援する相談機関を、中学校区ごとに、社会福祉法人や医療法人など市内41ケ所に委託して設置運営している。

この内、社会福祉法人の広島県同胞援護財団は、「庚午地域」をはじめ「古田地域」、「井口台・井口地域」、「亀山地域」、「三入・可部地域」の5ケ所の委託を受けている。▼社会福祉士や保健師、主任介護支援専門員など専門の職員が、相互に連携し、地域で暮らす高齢者の介護をはじめ、保健や福祉など様々な相談に応じている。▼主な業務：①生活機能チェックで生活機能低下や要介護認定でのケアプランの作成、サービス利用への支援。②健康不安介護の相談。③高齢者虐待早期発見と防止。④成年後見制度の活用支援。⑤ケアマネージャーの支援など。（＊左記の事例などがあれば、相談を。）

具体的な「相談例」

「庚午地域」での本人から、または家族、近所の人などからの具体的な相談例を中村さんに挙げてもらおう。

総合相談：①介護保険がどんなサービスか知りたい。②介護保険をどうやったら使えるのかわからない。②ひとり暮らしが不安、相談する相手がいない。③同居家族が問題を抱えていて誰かに相談したい。④介護保険を使って、自宅をバリアフリーにしたい。⑤高齢の両親と同居できず、いまのままでは心配。⑥一人暮らしの親を見守ってほしい。

介護や健康のこと：①足腰が弱くなって、転びやすい。②持病がいくつもあって、これから先が不安だ。③買い物やサークルに出かけるのがしんどい。④物忘れがひどく、認知症が心配。⑤老人ホームについて知りたい。

権利保護、虐待の早期発見・防止、近所の異変連絡等：①財産、相続などの権利を守りたいのだが。②成年後見制度の活用支援。③隣、近所で「よく怒鳴り声が聞こえる」のだが。④家族の方が介護で悩んでおられる様子だが。⑤新聞やチラシがポストに溜り、電気が付きっぱなし。

『よろず相談窓口』に猫の病気までが

「この事例のように包括センターは『高齢者の駆け込み寺』、『よろず相談窓口』と言われるゆえんです。事例ごとに専門担当員や連係プレーで対応します。また必要に応じて医療、法律、行政関係機関などに取次、紹介をします」。

よろず相談窓口といえば、「高齢男性から、『自宅の庭先で野良猫が死にそうです。どうにかしてくれませんか』と〝相談〟あり、猫の介護〟は想定外なので（笑）。本来の業務ではありませんが市の動物愛護センターを紹介、後日『無事引き取ってもらいました』との連絡があり、それを聞きほっこりしました」と中村さんは笑いながら話した。

中村 英寛
（なかむら　ひでとも）
広島市庚午地域包括支援センター
（広島市西区草津東2—8—5）
広島市中区榎町在住　1973/4生まれ
口田小・中、祇園北高校、佛教大学社会福祉学科 95年卒。2ケ所の特別養護老人ホーム、訪問・デイサービス会社を経て、広島県同胞援護財団に入り古田包括から23/4庚午包括に勤務

厳しい「身体介護」と草厳

中村さんの経歴の中に、2ケ所の特別養護老人ホーム（以下特老）勤務がある。特老の入居対象者は、介護保険サービスが受けられるが、認知症など要介護3以上と介護度が高いことが条件。そのため、食事介護、入浴介助、排せつ介助など身体介護の占める割合が高い。また、『終（つい）の棲家』という位置づけなので、多くの施設で看取りまで対応する。その時大切なのはその人の尊厳を傷つけないことだ。

上：H18年口田剣友会創立記念大会にて
○内が中村道場主代理
右上：H13年広島市剣道段別選手大会で、3段の部で優勝のトロフィーを手に

上：○内　右：民児協での講演中

今年出張のとき、在京の長男と長女一緒に

庚午包括のスタッフは総勢9名
社会福祉士3人、保健師2人
介護支援専門員3人、事務1人

デスクワーク中

若い頃の特老での経験が役立っている。社会福祉士、主任介護支援専門員、認定ケアマネジャー、介護福祉士の資格を合わせ持つ〝介護〟のプロである

素手で処理することも

新卒の中村さんが、身体介護を必要とする「特老」を選んだのには、それなりの理由があった。幼いころから子供会活動のリーダーとして、人の世話、面倒を見ることをいとわない子供だった。大学も社会福祉を専攻し、在学中に特老を建築計画中の人と知り合い、卒業と同時にさそわれ、勤務することになった。現場は聞くに勝る厳しいものであった。いまは同姓介護だが、当時は男女区別なく身体介護をした。おむつ交換、下痢の人もいる。いまでこそビニール手袋があるが、素手で処置した。手袋ですると、キタナイモノ扱いすると怒られた。もっとも素手でないとその人の健康状態がわからない、後で手を洗えばよいと考えていた。B型肝炎や感染の危惧への知識がうしかったという。

自分にしてほしいことは、他人にもしてあげる

また特老勤務時、夜勤は一人で20人ぐらいを見守る。徘徊や体調の急変化で救急車を呼ぶこともしょっちゅうあった。便を壁に擦りつける認知症の人もいる。命を預かっており、ケガをさせてはいけない一心だった。若い人がよくそんなことをと中村さんに聞くと、「苦労と思っと続けられません。この様な介護が必要な人がいるから、自分たちの仕事が大切なのだと思って従事していました」とあたりまえのことの様に話した。

剣道四段の中村さんはある「論語」を座右の銘にして、自分なりに解釈し実行している。「自分にしてほしいことは、他人にもしてあげる」。いずれ自分も認知症になり人様の厄介になる。剣道で学んだ「信・義・心（信頼や期待を裏切らない）」で誠意をもって仕事、チームワークする大切さを語る。これが中村さんをささえる〝バックボーン（精神的ささえ）〟とおもわれる。

特老での経験が役立つ

4年前に中村さんは父親を脳腫瘍で亡くした。亡くなる前一年間は次第に認知症が進み、昼間は母親が看て、夜間は中村さんが自宅に泊まり込みオムツの交換もした。「親不孝者でしたが、厳しかった父の面倒を看れたのも特老での経験が役にたちました」。

「2025年問題」と「介護難民問題」が発生か

2年後の2025年には、第一次ベビーブーム（1947年～49年）で生まれた人たち約800万人が後期高齢者となり、人口は一気に2,200万人に膨れ上がる。国民の4人に1人が75才以上だ。長寿に伴い認知症などになる人の増加は必至。介護が必要な人がこれから増えるも、働き手人口減少もあり必ずしも施設に入れない「介護難民」が出てくる。

これからますます地域包括支援センターの役割が重要になってくる。「高齢者」から「幸齢者」になれるよう中村さんよろしくお願いします。（編集　倉田和峰）

＊この「町内だより」の過去3ヶ月分が、草津公民館ホームページでご覧になれます。地域情報→「草津東町内だより」